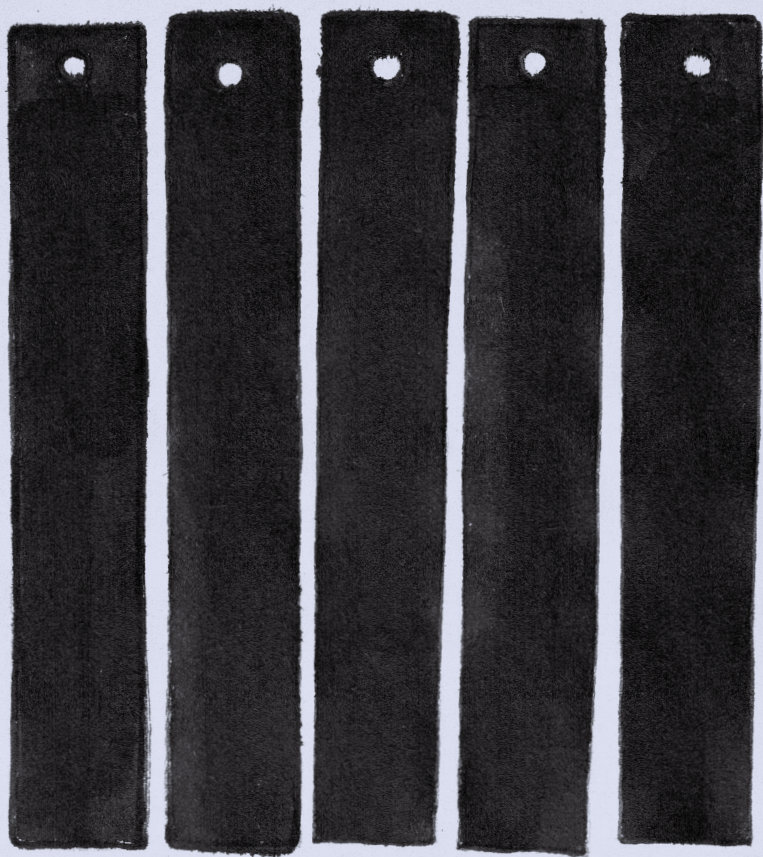


五十嵐靖晃 海渡り

IGARASHI Yasuaki

“Uniwatari”



津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と文化的空間の創造を目的として1984年に始まりました。アーティストの五十嵐靖晃を招聘し、津奈木町を構成する人、物、歴史、文化などさまざまな要素をアートでつなぎ、地域に根ざした新たな文化的活動を生み出そうと2018年に始まったのがアートプロジェクト「つなぎまちのつなぐかた」です。五十嵐は、3年間にわたるフィールドワークを経て、海沿いの集落に密やかに伝わる「弁天様のお祭り」を人々との協働によって持続可能な現代アート作品として再構築した《海渡り》を2021年秋に生み出しました。

「弁天様のお祭り」は、潮の満ち引きと関係のある旧暦によって執り行われるため、年によって《海渡り》の日程も変わります。4年目を迎えた今回は「海渡りの日」に競舟チーム「津奈木海龍」が全国大会のため参加できませんでした。しかし、つなぎ美術館のインターンシップに参加していた国内外の大学生・大学院生など大勢の若者たちの協力もあり、活気に満ちた「海渡りの日」となりました。

民間信仰にアートが接続して生まれた《海渡り》は、歴史と伝統を大切にしながらもアーティストと人々の協働によって地域とともに変化しながら後世へと受け継がれていきます。

つなぎ美術館（津奈木町）

令和6年《海渡り》スケジュール

① 海渡りの日	9月28日(土) 10:00～14:00 29日(日) 11:00～17:00
《海渡り》作品公開	9月30日(月)～10月26日(土)
② 組紐ワークショップ	10月25日(金) 9:00～15:00
③ 糸あげの日	10月27日(日) 10:00～13:00
④ 弁天様のお祭り	10月28日(月)*旧暦9月26日 11:00～14:00

会場 旧赤崎小学校付近(熊本県葦北郡津奈木町福浜165番地)



① 海渡りの日

2024年9月28日(土) 10:00～14:00、29日(日) 11:00～17:00

今年は、潮汐の関係で2日間の制作となりました。競舟チーム「津奈木海龍」が日本選手権大会のため不在のなか、重役を担ったのはつなぎ美術館のインターンシップに参加していた国内外の大学生・大学院生など大勢の若者たちでした。手に何重にもテーピングを巻き、声を掛け合い、地元の制作メンバーに支えられながら力強く糸を張っていきました。完成後、競舟の乗船体験では、潮の満ちた海の上に張られた糸の下を舟がくぐる、新たな風景を作り出しました。

「地域の一員へ」

しぎょう
執行 啓介さん 佐賀大学農学部 国際・地域マネジメントコース

昨年に引き続き、地域おこし協力隊のインターンとして《海渡り》に参加しました。1年間関わる中で、私のような外部の人間が温かく迎えられつつも、「お客様」として扱われない点が印象的でした。それにより、プロジェクトの準備や本番における各工程の意味や背景を知りながら経験することができました。この心地よさはプロジェクトに限らず、津奈木の住民の方々にも共通しています。「お客様」として扱われない中で感じた人の温かみに、この上ない喜びを感じました。

「手伝ってあげたい」

吉野 満利子さん 近くでグラウンドゴルフをしている住民

私は5年ほど前に津奈木町へ帰ってきて、いつも近くでグラウンドゴルフをしています。《海渡り》が始まったころは「なんばしょとやろか」と話をしながら、みんなで見ていました。見ているうちに、集まった人たちが頑張って糸を張る姿をみて、私も手伝ってあげたいなと思い、気づくと毎年参加しています。今年はお結びや卵焼きを作って持っていったら、大学生の子達が「おいしい、おいしい」と食べてくれて微笑ましく思いました。また来年もできる範囲でお手伝いをしてあげたいです。







② 組紐ワークショップ

2024年10月25日(金) 9:00～15:00

津奈木小学校と連携した地域学習は今回で3年目となりました。学習準備のため、つなぎ文化センターに設けた《海渡り》組紐制作会場には、小中学生が学校終わりに集まり、組紐や宿題をするなど各々の時間を過ごす場となっています。地域学習では、3年生約30人がグループに分かれ、組紐ワークショップ、風景スケッチ、作品鑑賞をしました。地域学習を受けた上級生を含め、多くの児童が《海渡り》を通じて津奈木町の文化や歴史に触れる機会となっています。これまでに組紐を習得した児童も約100名となり、作品の糸100mを組み上げる目標に少しずつ近づいています。

椎葉 ^{ももか} 百香さん 小学生

弁天様を長く一人で大切に守ってくれた松田テル子さんの話を聞き、自分も手伝いができたらいいなと思いました。五十嵐さんも「皆で組んだ紐をつなげたい」と言っていて、それを実現したかった。4本の紐でぐるぐる同じことを繰り返していくと、三つ編みみたいに1本に組めたのが凄かったです。磯遊びの時、友達とシーグラスを探し、海の色も鮮やかでキレイで楽しかったです。

椎葉 ^{ひさみ} 久美さん 百香さんの祖母

孫に誘われ、興味もあり組紐ワークショップにボランティアとして参加しました。弁天様のお祭りにアートが接続して生まれた《海渡り》はとてもすばらしく、このプロジェクトに少しでも関わることができ、感謝しています。組紐は今も自宅で続けていて、機会があれば100メートルの組紐にも挑戦したいと思います。



③ 糸あげの日

2024年10月27日(日) 10:00～13:00

《海渡り》の糸は、これまで海を渡って祈りを重ねた人々の軌跡と、島の頂上に鎮座する弁天様が地域を見守るまなざしを可視化しています。海渡りの日が見えないものを見えるようにする日とすると、糸あげの日は元の見えない風景に戻す日。約1ヶ月の展示期間を終えた糸は、集まった人々の手によって巻きあげられていきます。手慣れた様子でとんとん巻く人、糸巻き機に均等に巻く人など巻き方にも個性が見られました。すべての糸を巻きあげ、鳥居を設置すると元の風景に戻りますが、それは新たな風景にも感じられます。その後、氏名が書かれた木札を参加者に渡して糸あげを終えました。

「この姿がしっくりくる」 上村 公助さん 津奈木海龍

私は赤崎地域の出身で、いまでも弁天島に見える場所に住んでいます。赤崎小学校へ通っていたころ、教室から鳥居のある風景を眺め、たまに友達と島の頂上へと登っていました。気がつくと鳥居がなくなっていて、島へ登る道が狭くなっていたことに驚きと寂しい気持ちになったことを覚えています。糸あげの日、鳥居を元に戻すと子供の頃の記憶と繋がって「やっぱりこの姿がしっくりくる」と感じました。最近では《海渡り》の風景も見慣れてきて、長く続いていくと鳥居と同じように、この土地の風景になると思います。

吉野大工の仕事

2024年6月25日(火)
吉野大工の作業場



毎年発行される《海渡り》タブロイド。今年度は「吉野大工」こと大工の吉野強さん^{つよし}を取材し、初年度に作られた「糸巻き機」「弁天島の鳥居」から続く《海渡り》でのものづくりについて、五十嵐との対談を掲載しました。

《海渡り》で糸を張るために吉野さんが作った糸巻き機は、かつて不知火海で太刀魚漁をしていた時代に使われていた糸巻き機とほぼ同じサイズなんだそう。地元の大工が作る、その土地の道具を通じて、人の所作が時間を超えて繋がっていく。大工の仕事と道具に対する新しい認識が生まれた時間でした(みさこ)。



©吉野強さんが《海渡り》のために作った作品 1.陸から島に糸を運ぶための糸巻き機(令和3年)／2.復活した弁天島の鳥居(令和3年)／3.組紐を組むための組台(令和4年)／4.参加者の名前が並ぶ木札(令和5年)／5.弁天様に供える品を置くお供え台(令和6年)



④ 弁天様のお祭り

2024年10月28日(月)*旧暦9月26日 11:00～14:00

弁天様のお祭りを多くの人と共有して7回目となりました。島の祠へと登る道が険しいため、鳥居の前で参拝できるよう新たにお供え台を制作しました。島の頂上と鳥居に幟^{のぼり}をたて、弁天様に津奈木町の安泰を祈ります。お供え物には、赤飯や煮しめ、果物をはじめ亀萬酒造から御神酒、梅園菓子処(太宰府)から《海渡り》の印が入ったお菓子の奉納^{なもらい}がありました。直会では、参加者が各家庭から持ち寄った多くの料理やデザートが並び、年を重ねるにつれ様々な土地の食が集まる場となっています。会を終える頃には、島への道は海へと戻っていきました。

「長生きせねば」

ちちいわ
千々岩 勝次郎さん 赤崎の住民

昔は千々岩家と松田家が交互に弁天様のお祭りをしていて、父が島へ登っていたことを覚えています。お祭りの日、我が家ではいわしの煮干しに、ひじきやごぼうを混ぜた炊き込みご飯やお煮しめなど、ご馳走が並んでいました。中学卒業後、就職のため赤崎を離れ、30代で戻り、58～70才まで町議会議員を務めました。弁天様のお祭りは父から引き継いだ姉が松田テル子さんと共に続けていましたが、高齢化のため参加することができなくなっていました。今回、《海渡り》によって弁天様のお祭りが引き継がれていく在り方には大きな感動と期待をしています。なぜなら、本来、郷土愛のある地元民が継承の想いを強く持ちますが、この土地と関係のなかった人々も共に関わりあって続けていくという発想は思いつきもしませんでした。「いつまで続けるか」と聞いた私の質問に、五十嵐さんは「続けられるかぎり」と答えました。私はいま84才、長生きせねばと思っています。



「1本目、行きまあす!!!」

穏やかな不知火海に響き渡る力強い声を今でも鮮明に思い出す¹。

2018年に始まった《海渡り》²は、五十嵐靖晃が住民参画型アートプロジェクトを通した住民とのつながりによって、2024年の9月、無事に4回目を迎えた。実際に、この中心を担う役場の職員や住民たちは「五十嵐くんが来るから」と、口を揃えて準備する。つまり《海渡り》は、アーティスト・五十嵐靖晃を迎える行事となりつつあり、五十嵐は《海渡り》で大きな存在となっている。そのような中、五十嵐は《海渡り》の展望として「町の伝統になることを目指している³」と、語った。

ただ、それは、アーティストの役割を無くす行為につながっているように思われる。

なぜならば、「伝統」への固執により、これまでアートで築かれた津奈木町のつながりが単なる作家不在の参加型アート⁴やイベントへ回収されてしまうと考えたからだ。アートプロジェクトにおける作品制作は、アーティストが自らに課せられた責任を果たす行為である。そして、住民参画型アートプロジェクトにおける制作は、住民に対して誠意を示す行為でもある。《海渡り》は、住民が制作に参画したことで、世代を超えて住民をつなぐ場所へ変貌してきた。さらなる町の活性化に貢献するべく、「伝統」という言葉を起爆剤にしようとしているのだろう。ならば、現時点の五十嵐を中心とした《海渡り》は矛盾していないだろうか。

《海渡り》が津奈木町の「伝統」となる時、その中心は五十嵐ではなく、地域住民でなければならない。だが、現在の《海渡り》は、五十嵐の作品以外の何ものでもない。発起人が五十嵐だとしても、「伝統」にしていこうということは、これから五十嵐の名前や存在すら消すことが求められる。

もし、五十嵐が自ら名前や存在も《海渡り》から消すことができたならば、参加型アートに「伝統」という新たな道を開くのだろう。ただ、アーティストにとってそれが容易なことではないのは、想像に難くない。

五十嵐が、アーティストとしていかに答えを出すのか。そして、住民は《海渡り》をどのような形で続けていくつもりなのか。これからの《海渡り》はますます目が離せない。

アートをきっかけに、この先も津奈木町の穏やかな不知火海に活気のある声が響き渡ることに期待を寄せる。

¹ 筆者は、2024年9月17日～9月31日の期間、熊本県葦北郡津奈木町の地域おこし協力隊インターンに参加した。その際、準備期間を含めた3日間、《海渡り》に参加した。本稿は、活動内容と取材内容をもとに執筆している。

² 2021年から津奈木町のフィールドミュージアム事業へと形を変え、毎年開催されている。フィールドミュージアム事業とは、まち全体を博物館として捉え、文化・歴史の研究調査をもとに地域活性化を目指す事業のこと。

³ 9月30日の取材時に述べていた。

⁴ 近年の日本の参加型アートでは、アーティスト不在の形式も取られるようになっている〔鷺田：2011 参照〕。そのような中、明確な境界は未だ定義されていないアートと伝統の大きな違いとしてアーティストの有無を挙げる。

・参考文献

楠本智郎、濱田真大、三迫太郎編集『五十嵐靖晃 海渡り記録集令和3年』、津奈木町・つなぎ美術館、2022年3月
楠本智郎、濱田真大、三迫太郎編集『五十嵐靖晃 海渡り記録集令和4年』、津奈木町・つなぎ美術館、2023年3月
楠本智郎、濱田真大、三迫太郎編集『五十嵐靖晃 海渡り記録集令和5年』、津奈木町・つなぎ美術館、2024年3月
鷺田めろろ、後々田寿徳「第8回(最終回):これは〈作品〉なのか? 〈作者〉はだれか? @梅香堂〔ディスカッション〕」
『Dialogue Tour 2010』2011年05月01日号、アーツケープ(最終閲覧日2025年1月5日)
https://artscape.jp/dialogue-tour2010/10000589_3390.html

今年で4回目を迎えた《海渡り》は津奈木町の「新しい海の日」となることを目指して、土地の文化的要素を毎年1つテーマに決め、《海渡り》をかたちづくる重要な要素として紹介している。こうして積み重ねていくことで、やがて《海渡り》に参加することが津奈木町の魅力や未来に伝えたい大切なこと、平たく言えば「津奈木らしさ」に出会える機会となっていこう。ちなみに、これまでに「競舟(津奈木海龍)」、郷土料理の「ひろす」を紹介させてもらい、そのどちらも《海渡り》の中に登場する、いや、むしろなくてはならない存在となっている。

今年のテーマは「吉野大工」こと吉野強さんの大工仕事。これまでに作っていただいたものは、陸と島を結ぶ糸を運ぶための「糸巻き機」(令和3年)、復活した弁天島の「島居」(令和3年)、組紐を組むための「組台」(令和4年)、参加者の名前を記す「木札」(令和5年)、弁天様に供える品を置く「お供え台」(令和6年)。(※ちなみにこの記録集の表紙は木札を描かせてもらいました)これらをあらためて見てみると、そのどれもが“人の心を乗せるもの”として《海渡り》の中で役割を担ってくれていることに気が付く。「人の心を乗せ“その先”に届けるためのかたち」が、機能的にも造形的にも美しいことは言うまでもない。そして、見ても触れても並べても、どこか愛らしいのはきっと吉野大工さんの人柄をそこから感じるからだろう。

《海渡り》が行われる赤崎地区をはじめ津奈木町には吉野大工さんが建てた家がいくつもある。「あそこの家の階段は板の貼り合わせじゃなくて、いい木を使って大きな角材を積むように組んだから、立派な階段なんだ」そんな話を聞かせてくれる。届いた材料をプラモデルのように組み立てる現代の大工さんとは一線を画す、今は少なくなったいわゆる本物の大工さんだ。吉野大工さんが建てた家は適切なメンテナンスを行えば100年近くは住めるだろう。はたして100年後、《海渡り》はどうなっているだろうか。続いているだろうか。もちろん自分としては続いてもらいたい。であれば、長持ちするものをつくるコツと適切なメンテナンスの方法を次に吉野大工さんと会う時に聞いておかなきゃならない。そういえば、みかんも育てていると言っていたので、育てるコツも聞けるかもしれない。あらためて、これまではもちろんだが、これからの《海渡り》にとっても重要な人物だと、今、再認識した。

吉野大工さんがこれまで作ってくださったものに倣^{なら}って、《海渡り》が津奈木町の「人の心を乗せ“その先”に届けるためのかたち」となるよう、機能的にも造形的にも美しい存在であることをこれからも目指していこうと思う。そして願わくば、未来を生きる人にとってどこか愛らしさを感じるものであってもらいたい。

プロジェクト名：つなぎまちのつなぎかた

作品名：海渡り

期間：2018年4月～

主催：津奈木町、つなぎ美術館

企画・構成：楠本智郎（つなぎ美術館）、濱田真大（津奈木町役場）

記録集

編集：楠本智郎、濱田真大、みさこみさこ

執筆：飯島小雪、五十嵐靖晃、楠本智郎、濱田真大

デザイン：みさこみさこ

写真：みさこみさこ（P3～7, 10～13）、櫻場啓子（P9）

ドローイング：五十嵐靖晃

発行：津奈木町、つなぎ美術館

2025年3月 初版第1刷発行